

資源添加率向上技術開発研究(クルマエビ)

(予算区分 県行政 研究期間 平成 20～ 年度)
担当：水産技術研究所 浜名湖分場 吉田 彰

【研究の背景とねらい】

クルマエビは浜名湖の重要資源であり、資源増大のため種苗放流が行われています。その結果、大量放流以前(昭和 40～54 年)の平均漁獲量 47 トンが、大量放流後(昭和 55～平成 9 年)には 67 トンまで増加しました。しかし、平成 10 年以降は激減し、過去 10 年間の平均は 10 トンを下回っています(図 1)。

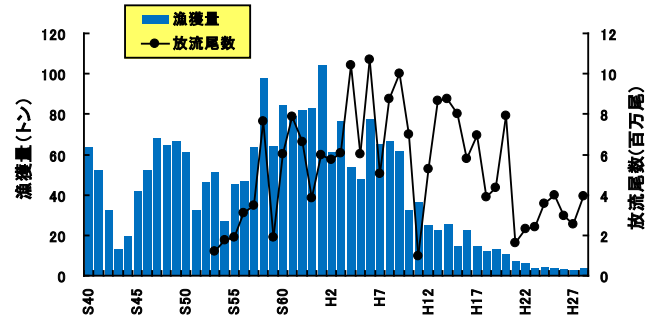


図 1 浜名湖におけるクルマエビ年別漁獲量と種苗放流尾数

この減少の原因究明と放流手法の最適化により、漁獲量の回復を目指します。

【これまでに得られた成果】

(平成 27 年度までの成果)

- 湖内浅所で天然稚エビの着底状況を定期的に調査しました。その結果、5～9 月の長期に亘って着底が確認されました。
- 市場で経時的に体長測定を行い、天然群と放流群を分離しました(群分析)。その結果、平成 22～25 年度放流群の回収率は平均 7.8%と推定されました。
- 平成 23 年放流群の放流効果を DNA 分析から検討した結果、回収率は 0.3%、と推定されました。群分析との回収率の違いの検討は今後の課題となりました。
- 漁獲量減少の要因の 1 つとして、従来の種苗放流箇所が高塩分化し、流れも速くなっていることが考えられることから、平成 26 年に、湖奥部への放流(奥部放流)を浜名漁協に提案し、現在まで秋季を中心に適宜実施されています。

(平成 28 年度までの成果)

- 平成 27、28 年の春の漁獲量は 26 年を上回り、前年秋季における奥部放流の効果である可能性が考えられました(図 2)。

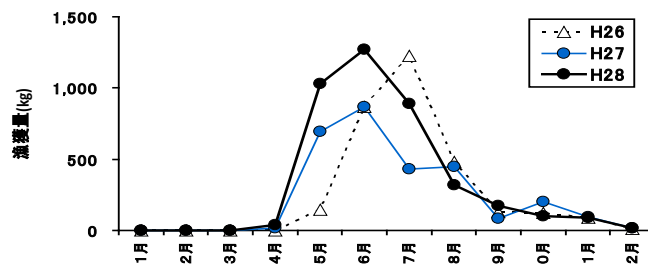


図 2 浜名湖におけるクルマエビ月別漁獲量

【期待される効果】

- 現在の浜名湖の環境に応じた、放流手法の最適化によりクルマエビ資源の回復が図られます。

【今後の計画】

- 群分析や DNA 分析等を継続し、放流手法の最適化を図ります。

(作成 平成 29 年 4 月)